

早期合格者に対する入学前教育

——鳥取大学での 15 年間の実践——

森川 修, 山田 貴光, 小山 勝樹, 小倉 健一, 古塚 秀夫 (鳥取大学)

鳥取大学では 15 年間に渡って早期合格者に対する入学前教育を行ってきた。宿泊を伴うユニークな研修を実施しており、国立大学としては e-ラーニングを早期 (平成 19 年) から導入し、学習習慣の継続を促してきた。研修プログラムは年々改良を重ねて、現在では、グローバル社会への興味喚起や鳥取県への興味関心を持たせる内容を取り入れている。また、入学センター教員が入学後にも関わりを保つことで、高校生から大学生活へのスムーズな移行を支援している。

1 はじめに

鳥取大学は、平成 16 年度入試から地域学部 (一部の学科を除く)、工学部と農学部の全学科で AO 入試を導入した。その年度の文部科学省「平成 16 年度大学入学者選抜実施要項について (通知)」の中の「第 2 選抜期日」でアドミッション・オフィス入試を実施する場合の留意点に「入学手続をとった者に対しては、これらの者の出身学校と協力しつつ、入学までに取り組むべき課題を課すなど、入学後の学習のための準備をあらかじめ用意しておくことが望ましい。」と記載されており、当時から入学前教育の実施を促していた¹⁾。それを受けて本学では、平成 16 年度 AO 入試・推薦入試 I 合格者に対して入学前教育を開始した (中村・福島, 2005)。本学の入学前教育の特色は、宿泊を伴う研修を実施している点である。(森川ほか 2011b)

平成 23 年度大学入学者選抜実施要項では「入学手続をとった者に対しては、必要に応じ、これらの者の出身高等学校と協力しつつ、入学までに取り組むべき課題を課すなど、入学後の学習のための準備をあらかじめ講ずるよう努める。(下線筆者)」と記載が変更された。これは、さらなる入学前教育の充実を意味すると考えられる²⁾。

その後、平成 29 年 7 月に「高大接続改革の実施方針等の策定について」(文部科学省, 2017a) が発表され、「平成 33 年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」(文部科学省, 2017b:45) に「入学前教育の充実」という項目がある。その課題として「早期の合格後の学習意欲の維持は、高等学校・大学双方において大きな課題となっており、高等学校における適切な指導と併せ、入学前教育の実質化を図る必要がある。」と記載されている。

このように、高等学校と大学が連携した入学前教育の実施が必要に迫られてきた。そこで、本稿では、新たに他大学で入学前教育の実施する際の参考となることを期待しつつ、鳥取大学で 15 年に渡り行ってきた早期合格者に対する入学前教育について報告する。

2 鳥取大学の早期合格者に対する入学前教育

鳥取大学の AO 入試の合格発表は 10 月下旬、推薦入試 I では 11 月下旬に行われ、早期に合格が決定する。そのため、入学までの期間が 4~5 か月と非常に長く、学習習慣継続やモチベーションの維持を目的に入学前教育を行ってきた。導入から 15 年も経過すると導入当初と比較して実施内容の見直しや変更した点も多くある。そこで、いくつかの期間に分けて実施した入学前教育の研修プログラム等について紹介をする。

2.1 平成 16 年度 AO 入試合格者

平成 16 年度 AO 入試合格者に対しては、以下の 6 項目のプログラムから構成されていた。

- ① 入学前プレオリエンテーション
(平成 15 年 11 月 4 日実施)
- ② プレースメントテスト
(平成 15 年 11 月実施)
- ③ キャリア教育のための能力適性検査
(平成 15 年 11 月実施)
- ④ 入学前教育合宿イベント
(平成 15 年 12 月 25 日~27 日実施)
- ⑤ 教科別通信添削課題
(平成 16 年 1~3 月実施)
- ⑥ フォローアップセミナー
(平成 16 年 4 月実施)

最初に入学手続の際に①を実施した。当時の入学手続は、来学して行い、参加率は 89%だった。①は 1 日で実施し、各学部長等の挨拶や②～⑤の説明を行った。②と③は、自宅で期日までに実施して、その結果を④でフィードバックした。次に⑤では、英語と数学の 2 科目を毎月 1 回、合計 3 回実施して提出させ、その結果を⑥で発表した。

入学前教育のために 2 度も来学させている点は特徴的で、特に④は 2 泊 3 日で実施している。これは、現在も「入学前教育合宿研修」と名称を変えて続けている。初日は 13 時開始でオリエンテーション、②と③のフィードバック、学長講演、在学生による学生生活の紹介、乾燥地研究センターの見学後、鳥取砂丘に近い宿泊施設へ移動した。夕食後は在学生との懇談や交流し 21 時に終了した。2 日目は朝食後に大学へ移動し、午前中に英語と数学の 2 科目の講義を 90 分間ずつ受講させた。午後は学部や学科が指定した物理、化学、国語の 60 分の講義を聴講し、その後にグループワークとプレゼンテーションを 4 時間行わせた。そして、宿舎に戻り、夕食後にプレゼンテーションの結果発表をして合格者全員に抱負発表をさせた。3 日目は朝食後に鳥取砂丘を散策し、11 時に解散した。

一方、推薦入試 I 合格者の入学前教育では、①を行わず、2 月 20～21 日に 1 泊 2 日で④を行い、その中で②と③を実施し、その結果と⑤の結果を合わせ、入学後の⑥で結果を発表した。1 日目の開始時刻は AO 入試合格者の場合と同じ 13 時だが、2 日目の終了時刻は 16 時だった。2 日目の講義を省略し、グループワークやプレゼンテーション、在学生による学生生活の紹介と交流を実施した。

金銭面では、②、③、⑤の費用は大学が負担し、①と④にかかる鳥取までの交通費、宿泊費と保険代 (AO 入試合格者は 14,000 円、推薦入試 I 合格者は 8,000 円) は、合格者の負担とした。

企画と運営は、アドミッションセンター³⁾の専任教員 2 名と入試課の職員が行い、他の教員や在学生の協力を得て、入学前教育 (特に④) を実施していた。

2.2 平成 17～19 年度 AO 入試・推薦入試 I 合格者

平成 16 年度に日数や研修内容の実施時期が異なる 2 例のプログラムを試行した結果、AO 入試合格者対象のプログラムを基本構成として、平成 17 年度以降の入学前教育を実施した。変更点は、入学手続の際に「入学前教育合宿イベント」を 2 泊 3 日で行ったことである。入試を含めて短期間に 3 度も鳥取に来てもらうことは、特に遠方の者にとって、時間や交通費など

の負担が大きいと考えたためであろう。

平成 19 年度 AO 入試合格者に対しては、2.1 節の①～⑥に対応するプログラムのうち、②～⑥の 5 つのプログラムから構成されていた。

- ② プレースメントテスト
(平成 18 年 11 月 (④の後に) 実施)
- ③ キャリア教育のための能力適性検査
(平成 18 年 11 月 (④の後に) 実施)
- ④ 入学前教育合宿イベント
(平成 18 年 11 月 17 日～19 日実施)
- ⑤ 教科別通信添削課題
(平成 19 年 1～3 月実施)
- ⑥ フォローアップセミナー
(平成 19 年 4 月実施)

④の内容は、基本的に平成 16 年度 AO 入試合格者実施分を踏襲した。2 日目の講義を生物まで含めて 4 種類と増やした時期 (平成 17 年度) があつたが、多くの教員に依頼をする必要があるため、平成 19 年度では、英語が必須で数学とキャリアデザインのうち 1 科目の選択となり、受講する科目が 3 科目から 2 科目に減少した。④で重要視されていたのは、グループワークとプレゼンテーションで、そこには在学生が大きく関わるようにしていた。この在学生には、主に AO 入試や推薦入試 I の入学生を起用していた。同じ入試で合格した同級生 (横) のつながりだけでなく、先輩 (縦) のつながりができることで大学生活への不安解消を期待していたと推測される。しかし、②と③を④で実施できず、いずれも自宅受検としていた。

また、平成 19 年度合格者は、⑤に加えて、eラーニングも選択できるようになり、これまで無料だった⑤は (eラーニングの選択の有無に関わらず) 実費 (10,000 円) が合格者の負担となった。

2.3 平成 20～25 年度 AO 入試・推薦入試 I 合格者

平成 19 年 6 月にアドミッションセンター教員 1 名が転出し、10 月に入学センター教員 1 名が採用された。これを契機として新たな視点で研修プログラムの見直しを図った。

まず、平成 20 年度からプレースメントテストを合宿研修の中に組み込み、英語以外の講義を取り止めた。講義の内容と教科別通信添削課題との関連もなく、形式的に行われていると感じられたために削減し、その時間はプレースメントテストの実施に充てた。英語も 30 分間で TOEIC の重要性を説明していたが、平成

25 年度から英語の講義も廃止した。講義を教育センター所属の英語教員に依頼していたが、担当教員が毎回替わり、説明内容にも大きな差が生じて講義の効果が期待できないと判断したためである。

さらに、教科別通信添削課題を止めて e-ラーニングだけを実施した。1ヶ月に1回と提出頻度が少ない通信添削では、学習実態の把握が困難だった。その点 e-ラーニングの導入で教科・科目の選択の幅が大きく広がり、これまで全学部・学科で一律だった課題を学部・学科ごとに異なるものとすることができ、学部・学科の希望する科目を採り入れやすくなった。

その後、平成 20 年 3 月に入学センター教員が 1 名転出し、当初のメンバーである 2 名がいなくなった。直後の平成 20 年 4 月と平成 20 年 9 月に 1 名ずつ教員が入学センターに採用され、それに伴い、入学直後に行う「フォローアップセミナー」の内容も変更した。これまでは、自宅受検していたプレースメントテストとキャリア教育のための能力適性検査、教科別通信添削課題や e-ラーニングの結果を返却するだけだった。それを合宿イベント時と同じ科目のプレースメントテストを行い、大学入学までに実施した e-ラーニングによる学習習慣の継続（基礎学力の定着）の効果を合格時と入学時の学力からみることにした。それに加え、キャリア教育のための能力適性検査の結果を 2 月に合格者へ返却して結果を読んでもらい、フォローアップセミナー時に詳しく解説し、ペアワーク等で自分の進路意識を考えてもらう機会とした。

平成 21 年度の合格者から、e-ラーニングの負担額を半分の 5,000 円とし、残りを大学の学長裁量経費を獲得して負担した。その結果、平成 20 年度では e-ラーニングの実施率が 85%程度だったが、この年から 100%の実施となった。さらに、この年からプレースメントテストの成績により、コンテンツの内容を個人によって変更した。詳細は 3.2 節で記す。

また、在学生との関わり方についても一部変更した。合宿イベントでは在学生と合格者の交流だけでなく、さまざまなプログラムに在学生の意見を取り入れていた。ところが、教育効果を無視して彼らが好きなことだけを行っている場合もあったため、入学センターの教員がコントロールし、在学生の企画として「在学生との交流」の 2 時間、その前の夕食の時間だけを在学生が関われる時間とした。

平成 22 年度合格者から、「合宿イベント」の名称を「合宿研修」に変更した。「イベント」という名称では、高等学校側に遊びの要素が入っていると受け取られる懸念があったためである。

平成 24 年度合格者からは、e-ラーニングの合格者負担を 3,000 円とした。これは、科学研究費補助金（基盤研究 C：課題番号 23501148）の採択によるものである。

平成 24 年度 AO 入試合格者に対しては、以下の 3 つのプログラムから構成していた。

- ・入学前教育合宿研修
(平成 23 年 11 月 11 日～13 日実施)
- ・e-ラーニング
(平成 23 年 11 月 13 日～平成 24 年 3 月 31 日)
- ・フォローアップセミナー
(平成 24 年 4 月 14 日実施)

平成 19 年度合格者まで合宿イベントの目的に、「入学までのモチベーションを高め、入学後の大学生活が円滑に送れること。」と記載されていた。また、プログラムでプレゼンテーションに大きな力を注いでいたことから、コミュニティーの形成を期待としていると考えられ、下線部の 2 点が入学前教育の目的であると思われた。平成 20 年度からは、これらに加え、合宿中にプレースメントテストを実施することで自己の現状認識をして入学までの期間に実施する e-ラーニングによる学習習慣の継続を目指した。

2.4 平成 26～30 年度 AO 入試・推薦入試 I 合格者

平成 24 年 1 月に入学センター教員 1 名が転出し、5 月に 1 名が採用された。人が入れ替わることでさらなる改革を行った。まず、2.3 節で記載した入学前教育の 4 つの目的（モチベーションの向上、コミュニティーの形成、自己の現状認識、学習習慣の継続）の概念を下記の 5 つに再構築した。

- A. 人間関係の構築とモチベーション維持
 - ① 高校までと異なる新しい人間関係の構築
 - ② 相互にエンカレッジできる関係性の構築
- B. 学習習慣の継続
 - ① 入学まで学習し続ける習慣の継続
 - ② 学びに対する意識動機づけ
- C. 基礎学力の把握
 - ① 入試で測れなかった基礎学力状況の把握
 - ② 入学前合宿研修時と入学直後での比較
- D. 高校生と大学生の違い理解
 - ① 論理的思考能力の重要性
 - ② 自己管理能力の重要性
 - ③ 能動的行動の重要性

E. グローカル⁴⁾意識の形成

- ① 鳥取県に対する理解
- ② グローバル社会への興味喚起

プログラムの内容としては、平成 25 年度以前とは大きな変更をしていないが、特に「E. グローカル意識の形成」として、鳥取県に対する理解を深めるため、グループワークのテーマとして鳥取県の観光施策を考えさせている。それに加え、海外渡航者の体験談を聞かせることで、本学の留学プログラムを活用して海外に興味を持つ取り組みを新たに含めている。

3 入学前教育のプログラム

平成 30 年度合格者に対して実施した 3 つのプログラム（入学前教育合宿研修、e-ラーニング、フォローアップセミナー）について、他大学での先行事例を含め、本学の歴史や現状について紹介する。

3.1 宿泊を伴う研修

鳥取大学の入学前教育の特徴は、宿泊を伴う研修を行っている点で、本学が実施する以前には山口大学の例がある。平成 14 年度から 12 月中旬の土日を利用して、1泊2日で県内の公共宿泊施設を会場として「入学前セミナー」を実施していた（大久保, 2005）。このセミナーは、平成 17 年度まで宿泊を伴って行われ、平成 21 年度までは、1日で開催されていた。

また、本学と同時期にあたる平成 16 年度から鹿屋体育大学が AO(SS)入試を開始し、その合格者に対する「入学前合同合宿」ではアドミッションセンター教員と面談を行い、大学の案内や心得などの話を持つ機会としている（前田ほか, 2005）。

それ以外には、九州工業大学情報工学部が、平成 18 年度から 2 月と 3 月に 2 度の 2泊3日の研修をしている。習熟度で 2 クラスに分け、数学と物理を 1 日目の午後から 2 日目の夕方まで 5 コマずつの講義を元高等学校教員が行っている。3 日目は英語の講座を習熟度別 3 クラスで行い、これには元高等学校教員と外国人講師がペアで実施している。なお、2 月と 3 月の研修には事前の宿題が課され、その採点は TA が行っている。3 月の研修では、在学生による学生生活の説明やサークル紹介の時間を設け、合格者 8 名と在学生 2 名の割合で懇談会も実施している。この研修会の費用は、食事や宿泊を含めてすべて大学が負担しており、さらに、交通費で 1 万円を越える部分も大学が負担している（日本リメディアル教育学会, 2012: 90-91）。これは、平成 30 年 11 月現在でも継続している。

他に宿泊研修を実施している例として、島根大学が平成 22 年度から 1泊2日で「入学前セミナー」を実施しており（田中, 2013; 和久田ほか, 2017）、長崎大学も平成 23 年度から本学と同じ 2泊3日で行っている（木村ほか, 2012）。このように宿泊を伴う研修を実施する大学は少なく、その最大の理由は運営が困難であるためと思われる。2.1 節で述べたように本学では入学センター教員と入試課職員が中心で企画・運営をするが、「学部・学科の説明」の 1 コマ（90 分）は、学部の教員や事務職員に依頼して実施する。プレースメントテストの英語は、学内の総合メディア基盤センターを利用しており、その職員にアプリケーションソフトのインストールと当日の不具合発生時の対応を依頼している。平成 24 年度までは講義も行っており、対応する部署や教員と連絡や段取りの調整、それに加えて入学前教育の意図を理解して実施してもらうためには、想像以上の労力が必要となる。

それと、在学生の活用も必要である。教職員だけでは、どうしても堅苦しくなってしまうため、合格者と年代の近い在学生の活用は重要である。ところが、事前に入学前教育の意味や彼らの役割をはっきりと伝えなければ、単に自分たちが楽しめる行事を中心に行ってしまう。その辺りを考慮して、平成 26 年度合格者の実施から入学センター教員の主導とした。

さらに、高等学校側の理解も必要である。本学での合宿研修が平日にかかるため、近隣の高等学校等への周知などで理解してもらい、多くの学校では公欠扱いとして合宿研修に参加を促してくれている。しかし、平成 30 年度 AO 入試合格者を輩出した高等学校を訪問した際、平日に行うことは高等学校の教育を妨げているというお叱りを受けた。入学センターでは、入学前教育報告書を平成 28 年 4 月に第 1 号、平成 30 年 4 月に第 2 号を作成し、これまでの実績表へ発送し、本学での特色である宿泊を伴う研修がある入学前教育の理解につながることを期待している。

3.2 学習習慣の継続を目指した e-ラーニング

鳥取大学では平成 19 年から、入学前教育に e-ラーニングを取り入れた。早期合格者には学習習慣を喪失し、大学入学後に大学の学習についていけなくなる不安があり、そのため、学習実態を容易に把握できる e-ラーニングの導入は、学習習慣の継続に効果的であると予想した（大学 e-ラーニング協議会、日本リメディアル教育学会, 2016: 156-159）。

そこで、e-ラーニングの前後で行っているプレースメントテストの結果を利用して、e-ラーニングによる

学習効果について検証した。しかし、e-ラーニングの受講科目は学部や学科によって異なり、合格者を同列に比較することが困難であった。その中で、英語はe-ラーニングの学習内容に個人差はあるが、全員受講している科目である。この英語に着目して入学前後の学力変化を調査した。入学前後のプレースメントテストで英語の試験内容が異なっているため、両方で実施している reading のデータのみを用いて効果測定した。

e-ラーニングの進捗率と入学直後のテスト成績との関係は、進捗率の高い合格者の成績が向上した。また、e-ラーニングを一定のペースで最後まで学習した合格者は、入学直後のテスト成績が良好であり、e-ラーニングが学習習慣の継続の有効なツールとして利用できる例を示した(森川ほか, 2011a)。

さらに、鳥取大学での平成17～23年度入試入学者までの修業年限内の退学率を入試区分別に調査したところ、AO入試と推薦入試Ⅰの入学者は、他の入試区分(推薦入試Ⅱ, 一般入試前期, 一般入試後期)入学者と有意差がないことを明らかにした(森川ほか, 2016)。しかも、森川ほか(2016)では、入学前教育にe-ラーニングを導入する前後(導入前3年間と導入後4年間)で修業年限内の退学率がAO入試入学者で7.5%から5.0%へ減少し、推薦入試Ⅰ入学者も8.3%から4.0%へ減少していることもわかった。入学前教育にe-ラーニングを導入し、学習習慣の継続を促進したことが、退学者減少の一因と推測される。

実は、e-ラーニングが最初から順調に実施できた訳ではなかった。導入初年度の実施後アンケートで、学習内容が難しすぎると易しすぎると回答した合格者がそれぞれ20%程度だった。このことから、合格時における合格者の学力差が相当大きいことが推測された。そこで、平成21年度入試合格者から合宿時のプレースメントテストの成績を用い、e-ラーニングの学習内容を変えた。例えば英語では、スタートを中学英語、高校英語、TOEICの3段階に分けた。これにより、学力に応じた学習内容が提供できるようになった。

3.3 入学直後のフォロー

2.3節に記載したように、入学直後のフォローとしてフォローアップセミナーを行っていた。平成19年度入試合格者以前は、単にプレースメントテストなどの結果通知の場だった。これを平成20年度入試合格者から、e-ラーニングの効果測定としてプレースメントテストを実施し、キャリア教育のための能力適性検査の結果を解説する機会とした。このセミナーは、13時から実施して18時頃に終わるため、希望者を募

り、在学生との交流を図るために懇親会を実施していた。夕食代の実費を徴収して行っていたが、平成27年度を最後に懇親会は廃止した。これは、学科によって同時期に宿泊を伴う研修の実施などでフォローアップセミナーに出られない学生の増加によるものである。なお、フォローアップセミナーに出られない学生には、各自にプレースメントテストを行わせた。

これに加え、新たな試みとして、平成29年度AO入試・推薦入試Ⅰ合格者から1年次の5月と10月に個人面談を実施した。平成29年度合格者から入学前・大学生生活目標設定シートを3月上旬に提出させた。このシートには、1年前期までの短期目標、卒業までの長期目標を設定させて、学業を中心とした大学生活を有意義に過ごすことを期待したものである。このシートを活用して大学生活が一段落する5月上旬から中旬と1年生前期の成績が発表されて後期が始まる10月上旬から中旬の2回の個別面談を行った。

5月に82名の対象者へメールで連絡したところ、期限内に80名が面談に訪れた。入学センター教員が来室した学生と10～20分の個別面談を行った。面談内容は、大学生生活目標設定シートの短期目標について実現が可能か、そのために何をすべきかを問いかけ、大学の講義内容(難易度)、入学式翌日に受検したTOEICのスコア確認、鳥取大学生の90%がひとり暮らしをするため、その生活で不安や困っていることがないかなど、大学生生活を1か月経過した時点で勉強・生活・課外活動の状況を聞くことができた。面談に来なかった2名のうち1名はメール不着とのことで後日来室したが、もう1名は、同じ学科の学生に尋ねても、講義に来てない様子だったので、直ちに所属学科の教員に状況を報告した。

同じく、10月にもメールで周知し、対象者82名中77名が入学センターを訪れ、5月と同様に入学センター教員が10～20分の個別面談をした。面談内容は、大学生生活目標設定シートの短期目標が実現できなかった場合に、今後の改善点を語らせた。また、前期の単位取得や成績、履修状況や難易度も質問した。それ以外には、夏休みの過ごし方を尋ねたり、アルバイトや課外活動、学習環境や交友関係など5月の面談時との状況変化について確認した。面談に来なかった5名のうち、1名は5月にも来ておらず、しかも、単位取得状況やGPAもきわめて悪く、直ちに学科へ伝達した。さらに、単位取得状況やGPAが悪い2名も所属学科に報告したが、他に2名は、単位取得状況やGPAが良好なため、特に対応はしなかった。

このように、定期的にコンタクトを取ることで入学

センターが気軽に相談できる場所と認識してもらえると、オープンキャンパスなどの入試広報や合宿研修でのサポート（在学生としての参加）の依頼がしやすくなる。入学センター教員は、合宿研修から顔合わせをしているので、その後も信頼関係が継続するようにこの面談を活用したいと考えている。

4 おわりに

鳥取大学では 15 年間に渡って早期合格者に対する入学前教育を実施してきた。これまでに多くの人に関わり、さまざまな取り組みを行ってきた。その中で、学習習慣の継続は、合格後の高校生活や大学入学後の学業に良い影響を与えていると思われる。

しかし、入学前教育を実施して、考えることも多い。例えば、入学前教育として来学をさせる必要があるか、遠方からの合格者も多い状況で宿泊まで必要であるか、学部教員との連携のあり方、在学生の活用についてなどである。入学前教育を実施するに当たり、どの方法が良いか関しての評価は大変難しく、現在でも試行錯誤しているのが現状である。

今後、他大学でも入学前教育を高等学校と大学がより連携して実施することが求められている中で、本学で試行錯誤してきた取り組みやその背景が少しでも参考になれば幸いである。

注

- 1) 「平成 16 年度大学入学選抜実施要項」（平成 15 年 6 月 5 日 15 文科高第 185 号 文部科学省高等教育局長通知）による。
- 2) 「平成 23 年度大学入学選抜実施要項」（平成 22 年 5 月 21 日 22 文科高第 206 号 文部科学副大臣通知）による。
- 3) 鳥取大学アドミッションセンターは平成 19 年 7 月に入学センターに名称変更した。
- 4) グローカルとは「グローバル」と「ローカル」の 2 つの言葉を掛け合わせた造語である。地球規模の視野で物を考えつつ、必要に応じて地域視点で行動することを目指し、「鳥取県に対する理解」と「グローバル社会への興味喚起」を促している。

参考文献

大学eラーニング協議会・日本リメディアル教育学会 監修 (2016). 『大学におけるeラーニング活用実践集——大学における学習支援への挑戦 2』ナカニシヤ出版, 156-159.
木村拓也・池田光壺・西原俊明・大橋絵理・田山淳・

竹内一真・井ノ上憲司・山口恭弘 (2012). 「長崎大学における入学前教育の枠組みと効果測定——学生チューターを交えたヴィジョン形成教育の組織化と基礎学力向上の取り組み」『大学入試研究ジャーナル』, **22**, 95-104.

前田 明・松下雅雄・倉田 浩 (2005). 「鹿屋体育大学AO(SS)入試について——高い競技力に特化した入学者選抜から入学前後教育」『大学入試研究ジャーナル』, **15**, 139-144.

文部科学省 (2017a). 高大接続改革の実施方針等の策定について (平成 29 年 7 月 13 日).

<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/1388131.htm> (2018年11月11日)

文部科学省 (2017b). 大学入学者選抜改革について.

<http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/_icsFiles/afieldfile/2017/07/18/1388089_002_1.pdf> (2018年11月11日)

森川 修・三宅貴也・小山直樹・清水克哉 (2011a). 「学力試験を課さない入試区分合格者へのe-Learning を用いた入学前教育の実践」『大学入試研究ジャーナル』, **21**, 231-236.

森川 修・三宅貴也・小山直樹・清水克哉 (2011b). 「入学前教育としての〔合宿研修〕の実施」『平成 23 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会大会 (第 6 回) 研究発表予稿集』141-146.

森川 修・山田貴光・小山直樹・古塚秀夫 (2016). 「鳥取大学における入試区分別の退学について」『大学入試研究ジャーナル』, **26**, 135-140.

中村肖三・福島真司 (2005). 「鳥大方式AO入試「入学前教育」について——アウェアネスを持った学生作りのために」『大学入試研究ジャーナル』, **15**, 111-117.

日本リメディアル教育学会 監修(2012). 『大学における学習支援への挑戦——リメディアル教育の現状と課題』ナカニシヤ出版, 90-91.

大久保 敦 (2005). 「山口大学AO入試入学者の合格から入学までの実態調査結果」『大学入試研究ジャーナル』, **15**, 119-124.

田中 均 (2013). 「入学前指導・教育の構想——入学前段階の情意的な特性把握の試み」, 『大学入試研究ジャーナル』, **23**, 179-184.

和久田千帆・美濃地裕子・為石勝美・福岡栄子 (2017). 「入学前指導・教育の方法——島根大学の事例から」, 『大学入試研究ジャーナル』, **27**, 161-166.